

『信用詐欺師』

—その語る（騙る）世界—

福岡 和子

(一)

出版当時、無視に近い反応しか得られなかった難解な作品『信用詐欺師』^①は、近年、思いもよらない注目を浴びるようになった。にもかかわらず、この作品が読者に生じさせる様々な疑問には、あまり変化はないようだ。一体、信用詐欺師とは何者なのか、悪魔なのか、キリストなのか、そのいずれでもないのか。そもそも信用詐欺師は、一人なのか、複数なのか。何故人々はかくも簡単に騙されてしまうのか。騙される人々は悪人なのか、善人なのか。言い替えるなら、騙し騙されるという関係には、作者の側にどのような価値基準が働いているのか。作者の位置は奈辺にあるのか。信用詐欺師とともにあるのか、乗客側にあるのか、あるいは、いずれにも相当の距離を置いているのか、等々。拙論も結局はこれらの疑問を避けては通れないと思われるが、その前に私は一つの素朴な疑問を呈してみたい。

メルヴィルは何故ミシシッピー川という興味深い題材を用いながら、でき上がった作品が示す様に、それをできるだけ背後に追い遣ってしまったのかという疑問である。それ迄のメルヴィルの作品に慣れ親しんだ読者なら、大河ミシシッピー川とそこを下る船が舞台と聞けば、『白鯨』の様に、美しい、或いは、豊饒な、或いは、残酷な、或いは、冷酷な自然のシンボリックな描写と、そこに様々な想念を読み込むイシュメルの語りが、再び展開されるのではと期待し

でも別段不思議ではないだろう。ところがその期待はみごとに裏切られて、二章にある様な数行^②を除いては、ミシシッピー川の描写は殆ど無いのである。他には、次々と入れ替わる乗客や信用詐欺師が下船したり乗船したりする（或いは、したことになっている）船着き場として、岸辺の情景がほんの数行書かれるだけである。イシュメルと違い、乗客たちも殆ど川面をのぞきこむことはないし、又、たとえ眼差しを川面に向けていても、何も見ていないのと同じである。例えば5章の大学生のように。かつてメルヴィルを魅了した太平洋の大海原と内陸を流れる川とでは、その規模も魅力も格段の違いがあったとしてこの問題を片付けることもできようが、N. アーヴィンや、F.O. マシーセンといった批評家は、^③ 折角の題材を生かしきっていない、いわば、描写の欠落を、作家の想像力、或いは、創作力の否定し難い衰えの証拠とみた。しかし、私にはむしろ、メルヴィルがミシシッピー川を描写することを故意に拒んでいるのではないかと思われるのである。とすれば、一体メルヴィルは自らの想像力にその様な犠牲を強いておきながら、何故わざわざミシシッピー川を作品の舞台として選んだのであろうか。

こうした疑問に一つの手がかりを与えてくれるのは、メルヴィルの数少ない遺稿の一つ、“The River”と題された52行からなる断片である。それは明らかに『信用詐欺師』の為に書かれたと思われるが、結局は作品に収められなかった文章である。

As the word Abraham means the father of a multitude of men so the word Mississippi (sic) means the father of a multitude of waters. His tribes stream in from east & west, exceeding fruitful the lands they enrich. In this granary of a continent this basin of the Mississippi (sic) must not the nations be greatly multiplied & blest?

Above the Falls of St: Anthony for the most part he winds on between banks of flags or through tracts of pine over marble sands in waters so clear that the deepest fish have the visable flight of the bird ...

But at St. Louis the course of this dream is run. Down on it like a Pawnee from ambush foams the yellow-painted Missouri ...

The Missouri would seem rather a hostile element than a filial flood. Larger, stronger than the father of waters like Jupiter he dethrones his sire & reigns in his stead. Under the benign name Mississippi it is the Missouri that now rolls to the Gulf, the Missouri that with the Timon snows from his solitudes freezes the warmth of the genial zones, ...^④

J. シーリーは、この“The River”の描写を取り上げて、「シンボリックな雰囲気を作り出すメルヴィル特有の才能」が衰えていなかったことは明らかであり、先ほど触れたアーヴィンへの反証としている。例えば、聖アントニー滝の生き生きとした描写などは、メルヴィルが実際にそこを訪れた時の記憶に基づくものだと考えてもおかしくないという。^⑤しかし、私には、“The River”の文章は、シーリーの主張とは違って、むしろメルヴィルの狙いが、ミシシッピ川の真に迫った描写を与えることから、既に離れようとしていることを示しているように思われるのである。その証拠にメルヴィルは、まずはミシシッピ川そのものというより「ミシシッピ川」という“言葉”に着目する。「エイブラハムという言葉が、群れなす民衆の父という意味であるように、ミシシッピ川という言葉も、多くの河川の父という意味である。彼の部族は東から西から流れ込み、その流域は誠に肥沃な地帯と化している。この大陸の穀倉地帯、ミシシッピ川流域において、諸部族は益々増え、神の恵みに浴するに違いない。」

当時においてすら既に使い古されたクリシェイに倣って、この様にミシシッピ川に一通りの賛歌を捧げておきながら、メルヴィルはすぐにもそうしたミシシッピ川の常套的イメージをすっかり覆してしまうのである。「聖なる川」が幸せな充足した流れを維持していると思われた「至福の時代」は、実は「夢」にすぎないのであって、セント・ルイスにおいてミズリー川が流れ込んで来る

時、「多くの河川（部族）の父」は、父より強い息子によってその王座を奪われてしまう。依然として、慈父であるミシシッピー川の名前を騙りながら、実は流れているのは侵入者ミズリー川であって、水面は混濁して黄変し、静謐や平和は破られ、敵意と混乱が支配するという。川の流れ (fall) は、実は「黄金の時代」からの「墮落」 (Fall) だったのである。一貫して用いられている擬人化用法からも分かるように、この文章はミシシッピー川にシンボリックな描写を与えることよりはむしろ、アレゴリー的表現を志向しているように思われるのである。様々な異人種を抱え込んで成立した平和で豊かな国を、多数の川が流れ込む大河になぞらえたクリシェイが、実はもはや、実質を欠いた虚像でしかないことを言わんとした。言い替えるなら、メルヴィルは人々が混乱と敵意に満ちた現実を生きながら、今なお、慈父なるミシシッピー川というイメージで、アメリカという国を捉えていることこそ問題にしようとしているのである。^⑥ 川そのものではなく、すでに意味を消滅したシニフィアンとしてのミシシッピー川にメルヴィルの関心はある。ここに恐らく彼が、一見魅力的な題材を扱いながら、それにこれまでのようにのめりこんではいかず、そこから全く異質な世界を切り開いていった理由があるのではないだろうか。

ところで、上に見たように、この断片は一旦は父なる大国の平和を自らも寿ぐかにみせながら、すぐ後でそれを「夢」として覆してしまった。このいわば自己抹消的な語り口は、次章に見るように、“The River” が、たとえ本文中に入れられることはなかったとしても、十分に『信用詐欺師』と同質のテキストであることを示している。そして何よりも既に指摘したように、現実とは無関係に一般のアメリカ国民が持ち続けている認識のパターンの虚偽性を暴くこと——「父なるミシシッピー川」という言葉は言葉でしかないこと——これこそ『信用詐欺師』が提示していくことではないだろうか。

(二)

自己抹消的文体を『信用詐欺師』の文体の特徴として指摘したのは、R. W. B. ルイスである。^⑦ 即ち、ある陳述の後に、それを修正し否定する反陳述が続き、その結果、両陳述がお互いを抹消しあって、後には何ら確固たる事実が残らないというような文体である。そうした文体の典型として、ルイスは第12章「不幸な男の物語」の妻ゴネリルの描写をあげている。

Goneril was young, in person lithe and straight, too straight, indeed, for a woman, a complexion naturally rosy, and which would have been charmingly so, but for a certain hardness and bakedness, like that of the glazed colors on stone-ware. Her hair was of a deep, rich chestnut, but worn in close, short curls all round her head. Her Indian figure was not without its impairing effect upon her bust, while her mouth would have been pretty but for a trace of moustache. Upon the whole, aided by the resources of the toilet, her appearance at distance was such, that some might have thought her, if anything, rather beautiful, though of a style of beauty rather peculiar and cactus-like.^⑧

ルイスによれば、作者のねらいは、こうした文体によって、読者を「思考の攪乱」に陥れ、何事であれ「認識」することの可能性を疑問視させることにあるといふ。以上のルイスの指摘は。それはそれとして非常に的確な鋭い指摘ではあるが、私にはルイスがある一点を見落としているように思われるのである。それは、ゴネリルの描写が一人の人物を相手に語られることである。しかも、その人物がこのような文体にもかかわらず、すっかりその描写を真実だと信じ込んでしまうことである。本章では、この点に注目し、ルイスとは全く別のアプローチでもって、ゴネリルの描写を分析してみようと思う。それによって、『不幸な男の物語』が、どうしてそのような文体で書かれなければならない

かったかが、もっと別の形で明瞭になると思われるからである。

不幸な男の妻が、ゴネリルというシェイクスピアきっての悪女の名前がつけられていることは今さら指摘する必要もないが、その悪女が、白人ではなく、インディアンの女性であるかのような描かれ方をしている点は注意を向ける必要がある。彼女が当時忌み嫌われた白人とインディアンとの混血なのかどうかは、この文章からは決め難いものの、特徴の殆どが、インディアンの女、或いは、未開人種の女との連想から描かれていることは明らかである。それもタイピー族の美しい乙女ファヤウェイのようなロマンティックな連想からは程遠く、インディアンに対する悪意に満ちたイメージばかりが連なって、悪女ゴネリル像が作り上げられていく。ひょっとすれば美人として通ったかもしれない容姿を損なっているのが、彼女の「インディアンの特徴」だということを皮切りに、「女にしてはあまりにまっすぐな身体」、「炔器の釉薬に似た堅さと焼き具合を思わせる顔色」、「特殊な、サボテンのような美しさ」、「インディアンの女のような堅い安定した健康と、同じく強い精神力と不屈さ」、「仰向けになってごろごろしていることが好きかと思えば、時としてみせるストイックな忍耐心」、「朝早くから昼の三時まで口を開かない陰気さ」等々。この様に次々と積み重ねられていく特徴には、白人社会に容易に溶け込めず、かたくなに自分を守り続ける異人種の女に対する不信、つまり不可解で不気味な存在に対する白人の側の露骨な不快感が感じられるのではないだろうか。拙論『タイピー』論^⑨で詳しく述べたように、当時白人社会に受け入れられることが可能だったインディアン女性は、ボカホンタス的存在でしかなかったことを思い出す必要がある。自らの家族、宗教、言語、慣習、名前すら、即ち、インディアンとしてのアイデンティティを保証する全てを捨てて、キリスト教に改宗し、西欧文化を受け入れ、白人社会に恭順の意を示した女性である。事実の程はともかくとして、少なくとも人々が、物語や劇や歌等によって作り上げていったボカホンタスのイメージは、その様な女性像が中心となっている。インディアン（的）女

性として、まさしくその対極的イメージを与えられているのがゴネリルと言って良い。

上記のような身体的特徴に加えて、彼女には、人中で若い男の手や腕を触るという困った性癖があるという。「夫にとって、妻の性癖は、未開人のタブーと同じ恐ろしい働きをした」という表現からもわかるように、この性癖もまた、未開人種と結び付けられる。これは、白人、特に男性が、未開人種の女性に対して持っていた意識的無意識的期待と緋い交ぜになった偏見——野蛮人の女は性的に放縦であるとする先入観——の現れと見ることができよう。メルヴィルが『タイピー』で告発したように、南海の島々を訪れた“文明人”の情欲の犠牲になった女性は多かったのである。

さらに、ゴネリルの異常さは、男性関係だけでなく、娘との関係にも現れる。娘を密かにいじめる「偽善的母親」だったという。しかし、注意を要するのは、母親としての適正を欠いているといった個人的欠点のレベルだけで、この非難の意味を解釈してはいけないことである。というのは、メルヴィルの同時代に多くの読者をつかんだ『広い、広い世界』のヒロインと母親との関係を見てもわかるように、当時のアメリカ社会において、福音主義的キリスト教信仰と結び付いて、いわゆる“domestic ideology”,^⑩ 或いは、「領域のイデオロギー」^⑪ が、強力に人々の考え方を支配していた事実をここで考え合わせなければならないからだ。それは、女性の役割は、家庭を守り、子供を立派なキリスト教徒に育てることにあり、そのためには女性は操正しく信仰心が厚くなければならないとする考え方である。ゴネリルが悪女たる所以は、彼女が女性なら、さらに母親なら、そしてキリスト教徒であれば、当然従うべき文化的コードを踏みにじってしまっているからなのである。そうした意味で女性であることを逸脱している女が、さらに「女性の権利拡張運動の活動家の意見に従って」夫を法廷に訴えたという。ここで言う活動は、当時エリザベス・スタントンらを中心とする女性の選挙権を要求した運動を暗に指すと思われるが、^⑫ これま

た、女性の領域は家庭にありとするイデオロギーに反して、政治という男性の領域に女性が侵入することを主張する活動であった。つまり、ゴネリルは、フェミニストたちと繋がりをもっていることで、又、悪女の資格が一つ増えたわけである。

結局、夫は妻を狂人として法廷で争うことにする。そういえば、彼女にはそもそも青い粘土を好んで噛じるという何とも奇妙な癖があったが、B. フランクリンは、当時の資料をあげて、それは精神を病む患者の一つの症状とみなされていたことを指摘している。^⑬ とすれば、ゴネリルを表現するのに、非—白人、非—キリスト教徒、非—母親、非—女性に加えて非—正常人というカテゴリーまで加わることになる。つまり、ゴネリルは、当時のアメリカ文化における規範とされた殆ど全てから逸脱した存在として表現されていたわけである。

ところで、ルイスが文体分析によって、ゴネリルは信用詐欺師による“invention”だと指摘したように、K. カーチャーも又、「物語」において繰り返される語り口——「少なくともその様に人は言った」とか、「同じ筋の話によると」——に注目して、この「物語」は、噂によって捏造された事実無根の話であると指摘した。^⑭ しかし、もっと正確にいうなら、「物語」の特徴は、噂が生み出す事実の不確実性であるよりは、むしろ、始めから事実その物が不在していることにあるのではないだろうか。「物語」は夫を中心とした周囲の目が捉えた“像”からのみ成り立っていて、一人の女性が本当はどのような女性であったかという「事実性」は、全く問題とはされていない。しかも、その“像”は、我々が見たように、単に個人的好悪の感情と結び付いたものというよりは、当時のアメリカ社会に深く根差した認識のあり方と大いに係わりを持っている。人々が自分たちとは異質な人物を、彼等自身の文化の網の中に絡み取ろうとした時、結果は反文化的存在としての醜惡なゴネリル“像”だったのである。

以上の観点を支えてくれるのは、ルイスの議論においては考慮されなかった

物語の聞き手である「善良な商人」の反応である。彼の最初の反応（4章）は、話をもたらした衝撃が並み大抵のものではなく、「不幸な夫」に対する同情は、妻の欠点が一つ一つ暴露されるごとに深まって行ったことを示している。さらに13章で、そんな妻と別れて夫は不幸どころか幸運だと考えることが出来るのではと言う株式仲買人（信用詐欺師）の反論に対しても、飽くまでも「物語」を過酷な真実と信じこんで譲ろうとしない。

“Ah, wine is good, and confidence is good; but can wine or confidence percolate down through all the stony strata of hard considerations, and drop warmly and ruddily into the cold cave of truth? Truth will *not* be comforted. Led by dear charity, lured by sweet hope, fond fancy essays this feat; but in vain; mere dreams and ideals, they explode in your hand, leaving naught but the scorching behind!”^⑩

商人のこの発言は、これだけを読むなら、迂闊な読者の共感を買うかもしれない。というのも、安易な楽観主義を戒めて、過酷な真実を見極める様に言うのは、一見いかにもメルヴィルの発言と読めるからだ。現に、置かれたコンテキストを考慮せず、これを作者その人の発言であるかのような扱いをした批評家すらいる程である。^⑪しかし、言うまでもなく、商人からこの様な反応を引き出した話が、詐欺師の仕掛けたただの作り話、嘘にすぎないのだから、些か過剰なこんな反応程こっけいなものはない。問題は、この嘘を商人がどうしてこれ程に疑うことなく真実として信じ切ってしまうのかにある。それは、我々の分析において既に明らかになった様に、「物語」が、普段意識しない程に聞き手の中に深く内在している社会通念、価値観、偏見、人種差別意識などに訴えて、共感を得られる様に計算され、構成された話だったからである。いってみれば、始めから嫌いな料理を出された人が、その料理が口に合わないと感じるのと事は同じなのである。しかし、商人が特別に人種差別主義者であった

り、女性差別主義者であったということではない。「物語」は、当時のアメリカ社会に属する平均的白人男性なら当然“不幸”と考えてしまうものを提供しただけなのである。言い替えるなら、「物語」と商人との間に簡単に共感が成立してしまうのは、どちらも19世紀アメリカ社会を支えるイデオロギーを共有しているからということができる。

「善良な商人」は、登場人物の中でも、本名を知りうる稀な人物の一人であるにもかかわらず、いわゆる小説の登場人物と呼べるような存在ではない。彼の落とした名刺から知りうる情報を除いては、彼に肉付けを与える人間関係や社会的位置関係などの説明は一切与えられていないのである。この小説ではその必要がなく、ただ“善良”という形容詞だけで充分なのである。商人は、「物語」（フィクション＝虚）を真実と信じ込み、“不幸な男”（信用詐欺師）に同情を示した。この小説では、“善良”であるとは、「物語」を織り成す文化的コードに自らもどっぷり浸っていることを意味するだけに落ちてしまったようである。

（三）

実際のミシシッピー川とは関係なく、諸川の父としての川のイメージが先行していくように、汚濁にまみれた現実とは関係なく、アメリカという国が、慈父なるミシシッピー川のイメージで捉えられ続ける。そして又、一人の女が、生身の人間性とは無関係に、“ゴネリル”という悪女像で捉えられる。より正確には、そんな女性は始めから居らず、その悪女像だけが一人歩きしていく。

この作品では、そんな例をいくつも見いだすことができる。いまさら言う必要もないが、小説成立の為には通常欠くことができない要素——複数の同じ登場人物の間に発展展開させられる一つのプロット——がないのが、この作品の特徴である。どうやら信用詐欺師は一人の人物（？）らしいが、波止場である

乗客が降り、又新しく別の乗客が乗り込んでくる時、詐欺師も又、服装から話しぶりに至る迄すっかり変えて、別の人物に成り済ます。そこで又、新たなやりとりが乗客と詐欺師との間に交わされる。しかし、そうした一連の繰り返されるやりとりの中に浮かび上がって来るものには、一つの共通するものがありそうである。

たとえば第三章を取り上げてみよう。詐欺師扮する“黒人”ギニーが、芸をしてみせて、乗客からお金を恵んでもらうシーンである。そこへもう一人の足の悪い男が現れて、施しをした乗客たちの行為を嘲笑い、黒人は偽物だと言っ
てのける。そこで人々はギニーは本物の黒人なのか、誰か白人が顔を黒く塗って化けているのではないのか、という疑心暗鬼に陥り、何とかしてその決着をつけようとする。然し、この場合も、ゴネリルと商人の場合同様、実は始めから“本物の黒人”など人々が知らなかった、或いは、知りたくもなかったのだとしたらどうなるのか？ 言うまでもなく、ギニーは、詐欺師の扮した黒人であるから、それを本物と信じた乗客たちは騙されたわけだが、ギニーは実は他ならぬ乗客たち自身が予め抱いていた“黒人像”を演じていただけだとしたら、果たして彼等は騙されたことになるのだろうか？

ギニーはニューファンドランド犬の背丈しかなく、動き回ると丁度人々の腿に触れるような不具の黒人である。さらに投げられた金を口で受け取るといった犬まがいの行為まで始める。つまりギニーは、白人との関係において、自らを犬に等しい位置に貶ることによって白人にこびへつらう。のみならず、貧困、ホームレスなどの不幸にも陽気に耐えていて、その原因ともいえる白人社会に対する恨みつらみは少しも表に現さない。乗客たちが簡単に“本物”として信じてしまったのは、詐欺師が演じてみせたこの様な“黒人像”だったのである。それは、彼等が言われなければ疑ってみることすらなかった“好ましい”黒人像である。従って、乗客は顔を黒く塗った白人に騙されたというより、より正確には、自分の中に存在していた黒人像に騙されたのである。彼等の認識

の枠の中には、実は始めから“本物の黒人”などなかったのであるから。

この様な騙し方は、実はメルヴィルの作品においては、前例がある。「ベニト・セレノ」におけるバボットを首謀者とする黒人奴隷たちである。既に反乱を起こして、船主を惨殺し、今も船長や白人乗組員たちを脅し恐怖に怯えさせているにもかかわらず、バボットたちは、援助の手を差し延べた白人アメリカ人船長の前では、全く違った黒人像を演じる。従順で、残虐な暴動を画策することなど思いもよらないような、無知で無邪気な黒人像を。言うまでもなく、“慈悲深い”アメリカ人船長が抱いている黒人像に迎合して騙す為であった。

しかし、このような共通点にもかかわらず、『信用詐欺師』の世界は、「ベニト・セレノ」のそれとは、大きく隔たっている。『信用詐欺師』においては、もはやバボットが描かれることはない。丁度ミシシッピー川の描写がいわば欠落してしまったように。そもそもバボットは作品に存在しないのである。それは、作家の関心が、乗客や読者の目を真の黒人像に対して啓かせることにはなかったからだと言うことができる。黒人を既に持っているイメージでしか捉えられないのであれば、もはや始めから実像を見せる必要はない。人々が日頃疑うことの無い虚像を逆手にとって利用し、彼等の愚かさを露わにすること。これがメルヴィルの思惑であったとすれば、彼が主人公（この用語を『信用詐欺師』の場合には用いることが妥当なのかどうか、極めて問題であるが）として、他ならぬ信用詐欺師を登場させることを考え付いたのは、真に適当というより他はない。決して実体をみせない、いや実体には全く意味がない、手を替え品を替え、次々と早変わりする仮面だけの存在、信用詐欺師こそ、仮構そのものである乗客たちの世界に進入する鍵を握った存在だということができるであろうから。

棺桶に片足を突っ込みながらも金に執着し続ける守銭奴は、薬草医（＝信用詐欺師）が差し出す「自然」という言葉にしがみつく。それは単なる「自然」ではなく、「母なる自然」（“*Dame Natur* (sic)” “*the universal mother*”）^⑦であ

る。守銭奴の握り締める金と、「母なる自然」という言葉は、まさしく等価といってよい——現実と遊離し、それ自体何の価値もなくなっているという意味において。この点をミズリーの独身男ピッチは鋭く指摘する。しかし彼も又、詐欺師の巧みな攻撃に屈してしまう。この手強い相手に対して詐欺師が用いた巧妙な手段——彼に言わせると「哲学的」「科学的」原則、理論、ということになるらしいが——、それは「物質的なものから、類推（アナロジー）によって精神的なものへと進んでいく」^⑧ 議論の仕方であった。即ち、「百合の蕾」から「百合の花」に、「産毛の生えた顎」から「髭の生えた顎」に、「乳歯」から「永久歯」に、「毛虫」から「蝶」に、「トウモロコシの種」から「黄金の穂」に至る変化という五つのアナロジーを用いて、子供にあった欠点が消滅し、「天使のような完璧な人間性」を提示する大人ができ上がっていくことを“証明”したのである。その結果、「少年すべて悪党」だと思っていたピッチも、もう一度新たな少年を雇うことに同意させられてしまうのである。これは、抽象的、形面上学的、道徳的な問題を、別の領域からの「イメージ」「比喩」（これらは周旋屋である信用詐欺師の用いた言葉である）を借用してきて、それらを全く恣意的に強引に等合で結び付けてしまうやり方である。言うまでもなくでき上がってくる等式には何の根拠もない。ピッチの言葉でいえば、「言葉を用いて語呂合わせをするように、観念の語呂合わせをしている」^⑨ のである。詐欺師はこの様な根拠の無いアナロジーを繰り返し用いることによって、この作品の主たるテーマともいえるべき言葉（イメージ、比喩）と、リアリティとの基本的関係を、より正確に言えば、“関係の喪失”を、露骨かつこっけいに、演じてみせたのだとすることができる。

拙論の冒頭に述べた様に、これまで信用詐欺師を、悪魔、キリスト、その他の異教の神など、人間を操る何か超自然的存在として見ようとした議論があった。しかし私には信用詐欺師がそのような存在である必要は無いと思われる。また、J. レイダは、信用詐欺師が1855年にニューヨーク州オルバニーに現れた

実在の詐欺師にヒントを得たものであった事を突き止めたという。^② 歴史的資料としての価値はあるとしても、この指摘も又、作品解釈の上ではあまり意味がない。信用詐欺師は、あくまで信用詐欺師、つまり外面だけの、いやより正確には、言葉だけの存在であって、正体はどうでもよい、実体など在りはしないのだ。彼（？）は、乗客毎に別な人物に成り済まし、喋り続ける。実に饒舌である。本来の意味を離れて一人歩きする言葉そのものである。現実から乖離してしまった言葉、空回りする言葉、それにもかかわらず、人々が今なおしがみつく言葉、或いは、人々の間を徘徊しては、彼等の目を晦まし続ける言葉である——一方に天使、友情、信頼、善意、真実、愛などの言葉があるとすれば、他方に悪魔、インディアン、黒人、ゴネリルなどの言葉がある。それらを使い続ける人々は、その背後は空虚でしかないことに気付いていないのだ。その意味の空隙に詐欺師が入り込んで来る余地がある。読者が、詐欺師の正体を見極めようとしても、それが空しい努力に終わるのは、詐欺師が、それらの言葉には何もないことを体現しているからに他ならないのではないだろうか。

【注】

- ① *The Confidence-Man: His Masquerade* ed. Harrison Hayford, Hershel Parker and G. Thomas Tanselle (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1984) 『信用詐欺師』からの引用は、すべてこの版による。
- ② *The Confidence-Man*, p. 9. しかし、これも具体的な情景描写ではない。
- ③ Newton Arvin, *Herman Melville* (London: Methuen & Co. Ltd., 1950) p. 249.
 “When he wrote *The Confidence-Man* Melville's purely plastic power, his fictive and dramatic power, was at too low an ebb for him to give a rich imaginative embodiment to the things he wished to say.”
 F. O. Matthiessen, *American Renaissance* (New York: Oxford University Press, 1941), p. 410.
- ④ *The Confidence-Man*, pp. 497-498.
 このニューベリ版には、作者が書き込んだり、削除した言葉も忠実に転記されている

が、ここでは読みやすいように省略した。

- ⑤ John D. Seelye, "Timothy Flint's "Wicked River" and *The Confidence-Man*," *PMLA*, LXXVIII (March, 1963), p. 75.
但し、シーリーの狙いは、これを例証することではなく、むしろメルヴィルが他の書物に依拠した可能性を示唆することにある。
- ⑥ Edwin Fussel もここにメルヴィルの "the act of subverting the traditional gestalt of the West" が現れていると解釈している。(*Frontier: American Literature and the American West* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1965). p. 306.)
- ⑦ R. W. B. Lewis, *Trials of the Word* (New Haven and London: Yale University Press, 1965) p. 65.
- ⑧ *The Confidence-Man*, p. 60.
- ⑨ 『『タイピー』の亀裂』（『英文学評論』第 LX 集, 1990）
- ⑩ Jane Tompkins, *Sensational Designs* (New York: Oxford University Press, 1985) pp. 171-172.
- ⑪ 有賀夏紀『アメリカ・フェミニズムの社会史』（勁草書房, 1988）p. 41.
- ⑫ *Ibid.*, p. 78.
- ⑬ Herman Melville, *The Confidence-Man* ed. H. Bruce Franklin (New York: The Bobbs-Merrill Company, Inc., 1967) p. 83.
フランクリンはつぎのような注をつけている。
Goneril may be a clay-eater in another sense, as explained in the article "Dirt-Eating" in *The American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge*, II (May, 1836), 372: "Those affected with it [this singular disease] are listless and stupid, almost to idiosy, in reference to things in general, yet evince a very remarkable cunning, in satisfying their depraved appetites ... the devouring of charcoal, chalk, dried mortar, mud, clay, sand, shells, ... is merely a symptom of disease, ...
- ⑭ Carolyn L. Karcher, *Shadow over the Promised Land* (Boston Rouge and London: Louisiana State University Press, 1980), p. 220.
- ⑮ *The Confidence-Man*, p. 67.
- ⑯ Arvin, p. 249. Fussel, p. 319.
- ⑰ *The Confidence-Man*, p. 106.
- ⑱ *Ibid.*, p. 121.
- ⑲ *Ibid.*, p. 124.
- ⑳ "Historical Note," in *The Confidence-Man*, p. 277.